

日本における戦略管理会計研究の 発展とその課題

Recent Research Development and Setback of Strategic Management Accounting (SMA) in Japan

矢澤信雄

Nobuo YAZAWA

日本語キーワード

戦略、管理会計、引用分析、計量書誌学

英文キーワード

strategy, management accounting, citation analysis, bibliometrics

要 約

本論文の目的は日本における戦略管理会計（strategic management accounting：以下 SMA と記す）の研究者による研究活動の状況を分析することである。まず、日本において SMA の定義を検討する。次に、日本語で執筆された SMA に関する論文が SMA の研究者の間でどのように引用されているか、引用ネットワークを作成し、引用分析をおこなう。さらに、時系列における引用ネットワークの変化を分析する。そして、日本語で執筆された SMA に関する論文の内容を分析し、最後に結論を導く。

Abstract

The purpose of this paper is to analyze research activities of SMA in Japan. First of all we examined the definition of SMA. Secondly we made citation network of papers on SMA and conducted citation analysis. Thirdly we examined the change of citation network from 1992 to 2008. Fourthly we conducted contents analysis of papers on SMA. Finally we made some proposals for the promotion of SMA research in Japan.

I 序 論

戦略管理会計 (strategic management accounting、以後 SMA と記す) の概念はシモンズ (Simmonds, 1981) によって提示された。その後、ブロムウィッチ (Bromwich, 1990)、サイモンズ (Simmonds, 1987)、シャンク & ゴビンダラジャン (Shank & Govindarajan, 1992, 1993) などの研究者が活発にこのテーマに関して研究活動を行った。

これらの研究者が SMA をどのように定義しているかを図表 1 に示した。この表からわかるように、現時点で SMA をどのように定義するかについて研究者の間で明確な合意は形成されていない。

本論文では引用分析 (citation analysis) を主な分析方法として用いる。そこで、この研究方法について説明する。

まず、引用とは論文などを執筆する過程で著者が必要とする他者の論文などを引く行為である。被引用とは論文などが他者の論文などの中に引用されている状態を示す。サイテーションインデックス (引用索引、citation index) とは、文献の間の引用情報に関する索引であり、ある文献がどのような文献によって引用されているかを知ることができるものである。たとえば、この索引で “Simmonds, 1981” の項目を引くとサイモンズが 1981 年に発表した論文がその後、どの論文中に引用されているかを知ることができる。自然科学関連分野を対象とした学術雑誌に関するサイテーションインデックスである Science Citation Index の刊行が 1960 年に開始された。これにより、ある文献がどのような

文献によって引用されているかを調べることが非常に容易になった。その後、電子媒体で利用できるようになり、カバーする範囲も社会科学や人文科学の分野へ拡大された。また、この種のサービスを提供するデータベースは現在では複数存在する。

引用分析とは、書籍の文献や雑誌の記事に記載されている引用について分析する学問である。学問領域としては、科学計量学 (Scientometrics) の一分野であり、計量書誌学 (Bibliometrics) の主要な分析手法である。

引用分析が注目されている理由は、研究者を評価する際に、その研究者の論文が他の研究者によってどれだけ引用されているかによって、評価対象となる研究者を同一分野の研究者がどれだけ高く評価しているかの定量的指標として用いることができるからである。したがって、研究に関する競争的資金に応募する研究者の提案を審査する際にも、応募してきた研究者の過去に発表した文献が他の文献によりどれ程引用されているかということもその研究者の提案を採択するか否かの重要な判断基準の役割を果たす。

本論文の目的は日本における SMA の研究者による研究活動の状況を分析することである。第 2 節においては日本語で執筆された SMA に関する論文が SMA の研究者の間でどのように引用されているか、引用—被引用関係のネットワーク分析をおこなう。第 3 節では引用—被引用ネットワークの時系列変化を分析する。第 4 節では日本語で執筆された SMA に関する論文の内容を分析し、最後に第 5 節で結論を導く。

本論文では、戦略管理会計に関連する日本語

図表 1 SMA の研究者による SMA の定義

	SMA の定義
Wilson (1995)	戦略問題に対し明示的に関心に向けた管理会計のアプローチ
Puxty (1993)	SMA という言葉は 1980 年代以降展開してきた次の 2 つの学派を包含するものとして用いられている。 ① Simmonds (1981) および Bromwich (1990) の研究に代表されるもの ② Johnson & Kaplan (1987) および Cooper & Kaplan (1987) の研究に代表されるもの
Bhimani & Keshtvarz (1999)	SMA については統一的な定義が存在していないと述べている
Guiling <i>et al.</i> (2000)	次の 3 つの基準をみだす管理会計の手法が SMA であるとしている ① 外部環境志向性、市場志向性 ② 競争相手への焦点 ③ 長期志向性、将来志向性
Roslender & Hart (2002)	SMA という言葉は次の 3 つの意味で用いられている ① Accounting for Strategic Positioning (戦略ポジションのための会計、以下 ASP と略す) の同義語として ② 戦略論の研究成果と管理会計とを結びつける試みの意味 ③ 上記②に含まれる研究の中で特に Simmonds および Bromwich による研究に限定して

出典：筆者作成

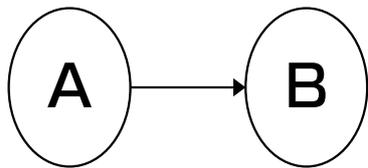
論文について、その引用回数を調査し、引用者相互のネットワークをいくつかのパターンに特定化し、日本における戦略管理会計研究の現状と課題を明らかにした。本論文の独創性はコンテンツ分析を併用しながら計量文献学のツールである引用分析という新しい手法で、新たな視角からこれまで気づかれなかった戦略管理会計研究の現状と課題に接近している点にある。2010年9月に発表された日本会計研究学会課題研究委員会最終報告書『日本の財務会計研究の棚卸し』は過去30年間の財務会計研究を分析した労作であるが、定量的手法による分析の部分には計量文献学の手法は用いられておらず、おもに歴史叙述のアプローチを採用している。『日本の財務会計研究の棚卸し』のような研究においても引用分析の手法を適用すれば、新たな視角からこれまで気づかれなかった日本の財務会計研究の現状と課題を見いだすことが期待される。

II 日本におけるSMA研究領域における論文引用ネットワーク分析

本節では日本語で執筆されたSMAに関する論文がSMAの研究者の間でどのように引用されているか、引用—被引用関係のネットワーク分析をおこなった。

分析方法としてはGoogle Scholarを検索エンジンとして使用し、論文のタイトルに「戦略管理会計」あるいは「戦略的管理会計」を含む1992年から2008年の間に発表された論文を抽出した。この条件に該当した論文は41件であった。

次にこれら41件の論文を発表した研究者の間の引用—被引用関係のネットワーク図を作成した(図表3)。

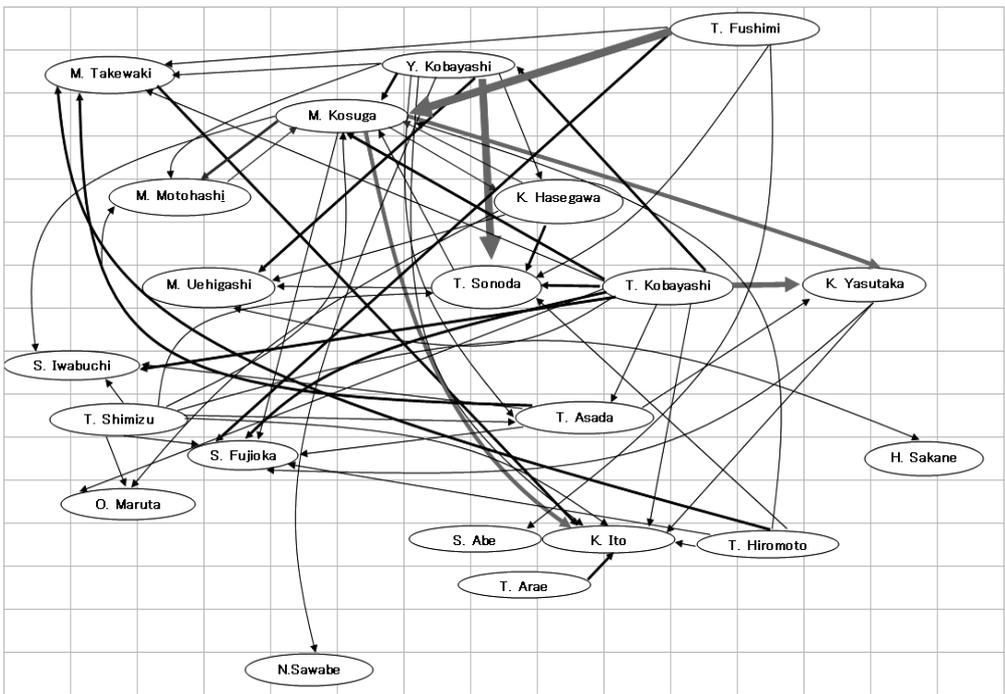


出典：筆者作成

図表2 アクターの基本的関係

図表2においてはアクターAからアクターBが線で結ばれていて、矢印はBに向いている。このことはBが発表した論文においてAの論文が引用されていることを意味する。また、ネットワーク図において矢印の太いほど引用回数が多いことを意味している。

そうすると、2つのアクターA、Bの間の関係には3種類あることがわかる。第1に、一方的関係(unilateral relationship)がある。これはAがBの論文を過去に引用したことはあるが、BがAの論文を過去に引用したことは



出典：筆者作成

図表3 1992～2008年における引用ネットワーク

ない、あるいはBがAの論文を過去に引用したことはあるが、AがBの論文を過去に引用したことはないという関係である。第2に双方向的関係 (bilateral relationship) がある。これは、AがBの論文を過去に引用したことがあり、BもAの論文を過去に引用したことがあるという関係である。第3に両者の間に引用—被引用関係が存在しない場合がある。

図表3において、引用—被引用関係のネットワークを分析したところ、2つのアクター間の関係については、図表4にまとめた。

図表4 引用ネットワークにおけるアクター間の関係

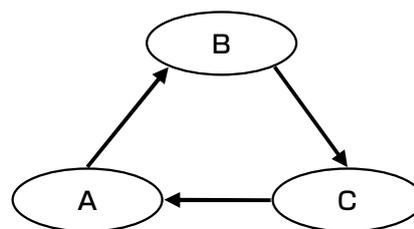
関係の種類	該当する関係の数	割合
一方向的関係	57	28%
双方向的関係	2	1%
関係なし	142	71%

出典：筆者作成

図表4からアクター間には一方向的関係にくらべ双方向的関係はほとんど存在しないことがわかった。アクター間に関係が存在する場合、それは圧倒的に一方向的関係であるということになる。しかしながら、わずかに存在する双方向的関係を分析すると以下のことがわかった。

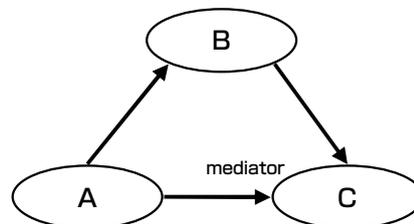
最も多くの双方向的関係をもつアクターはM. Kosugaであり、2つの双方向的関係を持っていた。繰り返しになるが、このケース以外には双方向的関係がほとんど存在していないことはこのネットワークの大きな特徴である。

次に3つのアクター間の関係を分析する。3つのアクターの間になんらかのかたちで引用—被引用関係の関係が存在する場合には、その構造には次の2つのタイプが存在する。第1のタイプとして3つのアクター間の矢印がサイクルの形になる構造がある (図表5)。第2のタイプとしてAからBへの直接の矢印があると同時にAからCを経由してBへ到達する矢印があるという構造がある (図表6)。この場合アクターCを本論文ではミディエーター (mediator) と呼ぶことにする。今回分析したアクター・ネットワークにおいては、第2のタイプしか存在しなかった。このタイプは以下に示すようにネットワーク中に5つ存在することが確認された (図表7～図表11)。



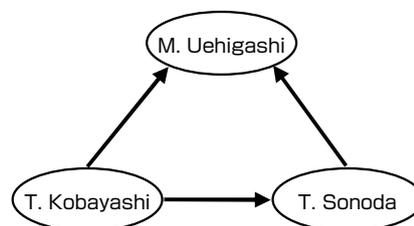
出典：筆者作成

図表5 3つのアクター間の関係 (1)



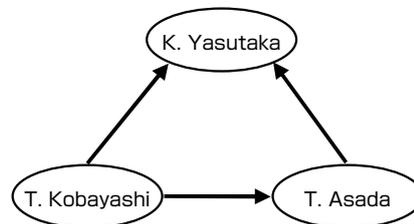
出典：筆者作成

図表6 3つのアクター間の関係 (2)



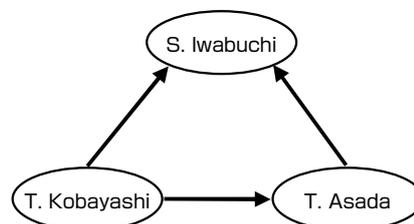
出典：筆者作成

図表7 3つのアクター間の具体的関係 (1)



出典：筆者作成

図表8 3つのアクター間の具体的関係 (2)

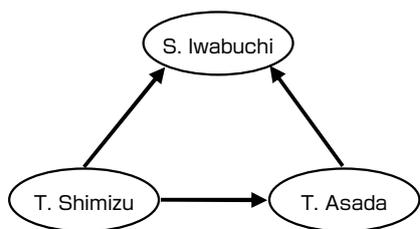


出典：筆者作成

図表9 3つのアクター間の具体的関係 (3)

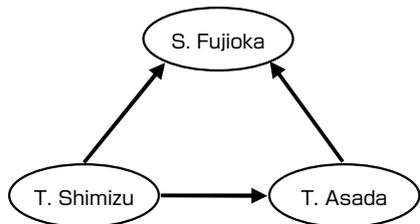
Ⅲ SMA 研究論文引用ネットワークの時系列分析

本節では、1993～1997年、1998～2002年、2003～2008年の3つの時期にわけて引用—被引用関係のネットワークにどのような変化が発生したかを分析した。



出典：筆者作成

図表10 3つのアクター間の具体的関係（4）

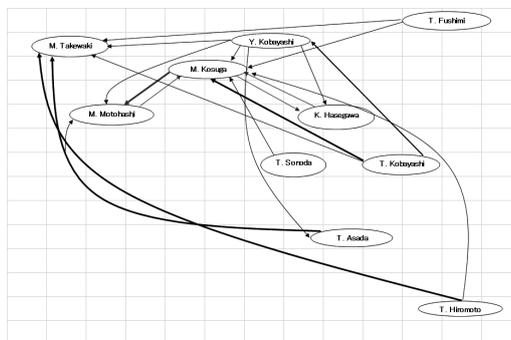


出典：筆者作成

図表11 3つのアクター間の具体的関係（5）

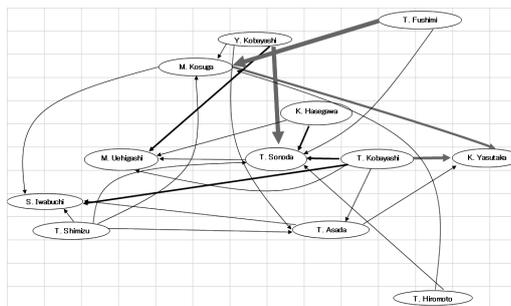
以上の図表7～図表11に登場するアクターを分析すると、ネットワークにおける3つのアクターの間関係については、次の2つのことがわかった。

- ① T. Asada は3つのアクターの引用—被引用関係に関して、ミディエーターとしての役割をもっとも頻繁に演じているアクターであった。
- ② T. Kobayashi と T. Shimizu は3つのアクターの引用—被引用関係において、もっとも頻繁に引用されるアクターであった。



出典：筆者作成

図表12 1992～1997年における引用ネットワーク



出典：筆者作成

図表13 1998～2002年における引用ネットワーク

図表15 引用ネットワークの時系列変化

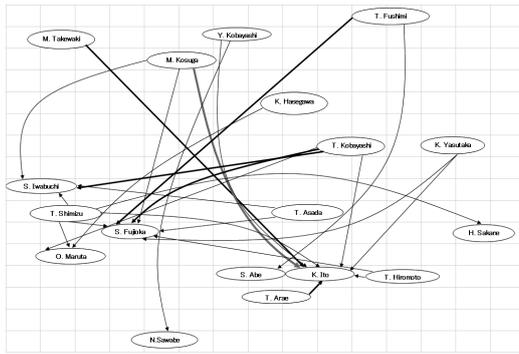
期間	1. アクターの数	2. 総引用数	1./2.	3. 引用されたことのないアクターの数	3./1.
1993～1997	10	23	2.3	1	0.1
1998～2002	12	42	3.5	4	0.3
2003～2007	18	27	1.5	7	0.4

出典：筆者作成

図表16 引用される頻度の多いアクター上位3名の時系列変化

ランク	1993～1997	1998～2002	2003～2007
1	T. Kobayashi 5件	T. Kobayashi 10件	M. Kosuga 4件
2	Y. Kobayashi 4件	Y. Kobayashi 10件	T. Kobayashi 4件
3	T. Hiromoto 4件	T. Fushimi 6件	T. Shimizu 4件

出典：筆者作成



出典：筆者作成

図表14 2003～2008年における引用ネットワーク

引用ネットワークの時系列分析から次のことが見いだされた。

- ① 図表15より、アクター数は10から18に増加した。したがって、SMAに関する研究活動は拡大を続けていると言える。
- ② 図表15より、各アクターの過去に発表した論文が1年間に日本語の論文において引用される平均引用件数は1998～2002年の期間においてピークに達し3.5であった。その後2003～2007年の期間において60%以上の減少を示し1.5に低下した。
- ③ 図表15より、日本語の論文に自己が過去に発表した論文が他者により一度も引用されたことの無いアクターの割合は10%から40%へと増加し続けている。
- ④ 図表15と図表16より、頻繁に引用されるアクターと自己の論文が全く引用されないことのないアクターとに二極化する現象が現れつつあることがわかる。この現象は、科学社会学でマタイ効果と呼ばれているものである。マタイ効果は1968年にアメリカの社会学者マートン (Robert K. Merton) によって提唱された概念である。マタイ効果とは、或る研究領域において、少数の注目される研究者の業績がその研究領域における他の研究者の論文に頻繁に引用され、大多数の注目されることのない研究者の業績は、たとえ有名な研究者の業績より引用することが適切である場合でも引用されない傾向があるという現象である。かなり多数の研究分野においてこの現象の存在が確認されている。マタイ効果の大きな原因として、査読審査によるジャーナルに投稿する研究者はできるだけ有名な研究者の業績を自分の論文の中に引用するように努めることで、自分の論文に一種の権威付けを

おこなおうとすることがあげられる。

IV コンテンツ分析

本節においては、前述の41編の日本語で執筆されたSMAに関する論文の内容を分析した。論文内容を分析した結果、次の3つのカテゴリーの少なくとも一つにすべての論文が属することがわかった。

① サーベイ論文

このタイプの論文は、過去にどのような研究が或るテーマについてなされたかを紹介する論文である。例えば、戦略管理会計について、どのような研究が過去になされたかを過去に他の研究者が発表した論文の内容を要約して紹介していくものである。このタイプの論文は、あるテーマについて独創性のある研究をこれからしようとする研究者にとっては現在の研究の最前線がどのような状況にあるのかを把握するのにきわめて有用である。しかしながら、このタイプの論文は数年に1編発表されれば十分その役割を研究者共同体において果たすのであり、この種の論文が査読審査を通過して掲載が認められることは社会科学の領域では極めてまれである。

② 事例研究

特定のテーマについて、具体的な事例を研究対象としてとりあげ、調査・分析を行った研究である。社会科学の領域では通常このタイプの論文が査読審査を通過して掲載が認められる論文の大多数を占める。

③ オリジナリティのある論文

査読審査により、掲載の可否が決定されるその審査基準の主要な要素として、独創性があるかということが本質的に重要である。③のタイプは②に属する論文も含めて、独創性があると認められる論文である。つまり、審査時点で審査対象となっている論文が提示している発見事項は、ほかの誰によっても発表されていないものであるということが確認されたときはじめてその論文は掲載される資格をもつことになる。したがって、①に属する論文が同時に③に属することはあり得ない。しかしながら、②に属する論文は同時に③に属することになる。

コンテンツ分析をおこなった結果、以下の3

つことが明らかとなった。

- ① 大多数はサーベイ論文である(60%)。
- ② 事例研究はほとんどない(9%)。
- ③ オリジナリティのある論文は少数派である(40%)。これは①において指摘した。独創性のないサーベイ論文が大多数を占めていることから必然的に生起している現象であるといえる。

V 結論

第1節から第4節における分析を踏まえ、日本における戦略管理会計の研究の場をより独創性に富み、活発なよい環境にするにはどのようなことが必要となるのだろうか。本節ではこの点について考察をおこない、その結果として以下の5つの提言をおこなう。

提言1 事例研究をもっと充実させる必要がある。

事例研究が全体の9%しかない。社会科学においては、仮説を提示しその仮説の妥当性を検証するために事例研究は不可欠である。事例研究が全体の1割に満たないということはこの分野では仮説を提示してもそれを検証することが十分になされていない恐れがある。この分野の科学性を担保するためには事例研究を充実させることが非常に重要であると考ええる。

提言2 サーベイ論文の発表に力を注ぐよりも独創性のある論文を発表することに研究活動の重点を置くべきである。

前節で述べたように、サーベイ論文は、あるテーマについて独創性のある研究をこれからしようとする研究者にとっては現在の研究の最前線がどのような状況にあるのかを把握するのにきわめて有用なガイドとなる。しかしながら、このタイプの論文は数年に1編発表されれば十分その役割を研究者共同体において果たす。また、サーベイ論文はあくまでも先行研究の紹介に過ぎず、独創性を有する論文ではない。それにもかからず、サーベイ論文が全体の6割を占めている状況は、この分野において独創性のある論文の産出に研究者のエフォートが十分に投入されていないことを意味する。オリジナリティのある研究をおこなうことがSMAの分野では今後非常に重要であると考ええる。

提言3 研究者間の研究活動における連携は研究活動の生産性をさらに向上させることが期待できる。

引用分析において、双方向的引用関係がほとんど存在しないことが判明した。もしもSMA研究に取り組んでいる研究者がお互いに情報交換をしながら研究活動を展開していけば、研究活動の生産性は非常に向上すると考える。徒弟関係(mentorship)のようなかたちにとどまらず、研究者同士が対等の立場に立ったより柔軟なwin-winの協同研究関係を創っていくことが、SMAの研究者共同体全体の生産性を向上することにつながると考える。これにより、双方向的引用関係も必然的に増加していくことになるのではないかと。

提言4 研究者の極端な二極化を避けるため、研究費の配分に当たっては特定の研究者に研究費が偏りすぎないように政府は十分慎重になるべきである。

前述のマタイ効果の研究者共同体におよぼす悪影響を取り除くために、競争的資金を配分するときには、高く評価されている少数の研究者に研究資金が偏りすぎないように留意する必要がある。具体的には、競争的資金を配分する審査の際に、応募者を評価する評価尺度の一つとして応募者の業績が他の研究者に何件引用されているかという評価尺度があるが、その尺度を適用する際に応募者の業績の被引用件数にはマタイ効果の与えるある種のバイアスがかかっていることを意識することが必要であると考ええる。特に、博士号を取得したばかりの若手研究者は過去の研究歴が短いので業績が少ないことが多いし、他の研究者による被引用件数も通常はほぼゼロである。しかしながら、競争的資金の配分にあたっては人材育成の観点からも、若手研究者の評価にはその研究者のもつポテンシャルや将来性を評価尺度として重視することが大切であると考ええる。

提言5 戦略管理会計という用語が研究者の間で様々な意味で用いられていることには、誤解が発生するリスクがある。会計の研究者の間でこの用語の統一的な定義を定めることが望ましい。

一般に、用語の定義が研究者の間で異なっている状況では建設的な議論が成立しにく

い。したがって、SMAの統一的な定義を早急に確立することが必要ではないか。

ここで、筆者が文献調査に基づき妥当であるとする戦略管理会計の定義は、次のようなものである。まず、American Institute of Certified Public Accountants(AICPA)は、管理会計を次の3つの領域に分類している。すなわち、①経営戦略に関わる領域、②業績管理に関わる領域、③リスク管理に関わる領域である。そこで、「戦略管理会計とは上記3領域のなかで①に該当する領域、すなわち企業の経営戦略に関して管理会計の視点からなされた研究である」と定義するのが様々な論者による戦略管理会計の定義を包括する定義として妥当であると考えられる。

また、前述したように2010年9月に日本会計研究学会課題研究委員会最終報告書『日本の財務会計研究の棚卸し』が発表されたことを踏まえると、本論文の戦略的管理会計研究への貢献事項の一つとしては、今後『日本の戦略的管理会計研究の棚卸し』のような研究プロジェクトを実施するときに、歴史的叙述の手法のみに頼るのではなく、コンテンツ分析と併用して引用分析のような定量的手法を用いることが有意義であることを実際にデータを分析することにより示したことがある。さらには、将来『日本の管理会計研究の棚卸し』といったより大規模なプロジェクトを実施する場合にもきわめて有効な分析ツールを提供したことが本論文の学問的貢献であり、ひいては引用分析のような定量的分析手法をコンテンツ分析などの手法と併用することにより、より効果的な研究資金配分をおこない、管理会計論の分野における研究活動のバランスのとれた展開を支援することができる。と考える。

ただし、引用分析は論文の内容(つまり質)に及ぶものではなくあくまでも定量的分析であり、上述のようなプロジェクトを実施する場合には引用分析のような定量的分析手法と、歴史的叙述やケーススタディのような論文内容の質的分析手法の両者の統合によるバランスのとれた研究を行うことが重要になると考える。

今後の課題としては、日本語文献のみならず、英語文献についてもSMAの研究を抽出し引用ネットワークを作成して、引用分析をすることがあげられる。さらにはアクターの国籍を日本人に限定せず、拡大していくことも今後検討すべき一つの課題である。

参考文献

- Barney, Jay B.[1996] *Gaining and sustaining competitive advantage*. Addison-Wesley Pub
- Bhimani, A & Keshtvarz, M.A.[1999]. British management accountants: strategically oriented. *Journal of Cost Management*, 13 (2), 25-31.
- Bromwich, M. [1990] The case for strategic management accounting: the role of accounting information for strategy in competitive markets, *Accounting, Organizations and Society*, 15(1/2)
- Guiding, C. et al. [2000]. An international comparison of strategic management accounting practices. *Management Accounting Research*, 11 (1), 113-135.
- Puxty, A.G. [1993]. Strategic management accounting. In *the social organizational context of management accounting* (pp. 9-10). Academic Press.
- Roslender, R. & Hart, S.J. [2002]. Integrating management accounting and marketing in the pursuit of competitive advantage: the case for strategic management accounting. *Critical Perspectives on Accounting*, 13 (2), 255-277
- Shank & Govindarajan, [1992] Strategic cost management: the value chain perspective, *Journal of Management Accounting Research*, 9
- Shank & Govindarajan, [1993] *Strategic cost management: the new tool for competitive advantage*. Free Press (種本廣之訳『戦略的コストマネジメント』、日本経済新聞社、1995年)
- Simmonds, K. [1981] Strategic Management Accounting, *Management Accounting*, 59(4).
- Simonds, R. [1987] Accounting control systems and business strategy: an empirical analysis, *Accounting, Organizations and Society*, 12(4)
- Wilson, R.M.S.(1995). Strategic management accounting. In Ashton, D.J., Hopper, T.M. & Scapens, R.W. (Ed.), *Issues in management accounting* (2nd ed.) (pp. 159-190). Prentice-Hall.
- 安部彰一 [2004] 「戦略的マネジメントの意義と戦略管理会計の実践的課題」、『亜細亜大学経営学紀要』、第11巻第2号
- 相川奈美 [2004] 「ACI Packaging NZにおける戦略的管理会計」、『経営研究』(愛知学泉大学)、第18巻第1号
- 新江孝[2005]『戦略管理会計研究』、同文館出版
- 浅田孝幸[2002]『戦略的管理会計』、有斐閣
- 浅田孝幸 [2001] 「戦略的管理会計の構築」、『会計』、159(1)
- 伊藤克容 [2004] 「『戦略的管理会計』論研究の動向」、『企業会計』、2004年9・10月号
- 伊藤和憲[2007]『ケーススタディ 戦略的管理会計』、中央経済社
- 岩淵昭子 [2000] 「戦略的管理会計に関する一考察：百貨店の事例から」、『東京経営短期大学紀要』、第8巻
- 上東正和 [1998] 「戦略的管理会計研究の展望」、『高岡短期大学紀要』、第11号
- 小田裕也 [2006] 「戦略管理会計：その意義に対する一考察」、『広島大学マネジメント研究』、第6号
- 上總康行 [1999] 「戦略的計画設定と予算管理との結合 -戦略的管理会計論に関する一考察-」、『経済論叢』、164(6)
- 小林哲夫 [1998] 「アカウンタビリティの概念と戦略的管理会計」、『国民経済雑誌』、177(3)
- 小林啓孝 [1993] 「戦略的管理会計論の枠組み」、『三田商学研究』、35巻6号
- 小菅正伸 [1994] 「戦略管理会計の課題」、『企業会計』、第46巻第6号
- 小菅正伸 [1995] 「戦略管理会計の構造」、『商学論究』(関西学院大学)、第42巻第1号
- 小菅正伸 [1996] 「戦略管理会計の理論的基礎」、『商学論究』(関西学院大学)、第43巻第2号
- 小菅正伸 [1997] 「戦略管理会計手法としてのバランス・スコアカード」、『商学論究』(関西学院大学)、第45巻第1号
- 小菅正伸 [1998] 「わが国における戦略管理会計の現代的意義」、『商学論究』(関西学院大学)、第46巻第2号
- 小菅正伸 [1999] 「戦略管理会計と環境問題」、『商学論究』(関西学院大学)、第48巻第1号
- 小菅正伸 [2001] 「戦略管理会計の国際的比較研究における

- 課題』、『商学論究』（関西学院大学）、第48巻第4号
- 小菅正伸 [2004] 「戦略管理会計における戦略マップの意義」、『商学論究』（関西学院大学）、第52巻第1号
- 坂根博 [2002] 「事業支援と戦略管理会計」、『商大論集』（兵庫県立大学）、54(1)
- 坂根博 [2004] 「戦略的管理会計のフレームワーク」、『商大論集』（兵庫県立大学）、55(3/4)
- 坂根博 [2005] 「日本の管理会計と戦略的管理会計との交渉」、『商大論集』（兵庫県立大学）、56(3)
- 坂根博 [2006] 「社会の構造的変化と戦略的管理会計」、『商大論集』（兵庫県立大学）、58(1/2)
- 澤邊紀生 [2007] 「戦略管理会計とリスクマネジメントの融合」、『商学論集』（福島大学）、第76巻第2号
- 園田智昭 [1998] 「自製か購入かの意志決定の再検討（1）－戦略的管理会計の観点から－」、『三田商学研究』、第41巻1号
- 園田智昭 [1999] 「戦略的管理会計と非財務的尺度」、『三田商学研究』、第41巻6号
- 高橋均 [2001] 「デジタル・エコノミー下の戦略的管理会計とそのディスクロージャーに関する研究」、『年報財務管理研究』、第11号
- 武脇誠 [1993] 「戦略管理会計論：序論」、『富山大学紀要・富大経済論集』、39(1)
- 武脇誠 [1994] 「戦略管理会計論：新しい観点からの研究」、『富山大学紀要・富大経済論集』、40(1)
- 武脇誠 [1998] 「戦略管理会計論の展開」、『東京経大学会誌』、208
- 西山茂 [1998] 『戦略管理会計』、ダイヤモンド社
- 日本会計研究学会課題研究委員会最終報告書 [2010] 『日本の財務会計研究の棚卸し』
- 長谷川恵一 [1996] 「戦略的管理会計の模索」、『早稲田商学』、第366・367合併号
- 廣本敏郎 [2004] 「戦略的管理会計論－伝統的管理会計論との対比」、『管理会計学』、日本管理会計学会、12(2)
- 藤岡資正 [2004] 「戦略管理会計の展開－持続的競争優位との関連を中心として－」、『経営研究』（大阪市立大学）、54(4)
- 伏見多美雄 [1997] 「ゼネラル・マネジメントを支援する戦略管理会計」、『会計』、151(1)
- 丸田起大 [2003] 「戦略管理会計のフィードフォワード構造：ダブルループ・フィードバックとフィードフォワード」、『経済学研究』、53(3)
- 本橋正美 [1996] 「戦略管理会計の理論的フレームワークの構築」、『明治大学社会科学研究所紀要』、第35巻第1号
- 安酸建二 [1998] 「戦略的管理会計の現状と研究課題：文献レビューを通じて」、『流通科学大学論集 流通・経営編』、11(1)